

古事記から学ぶ その9

大国主神から邇邇芸命(ににぎのみこと)へ

葦原中國は平定されて、大国主神は世を去った。高天原の天照大御神の思惑通り、御子である正勝吾勝勝速日天忍穗耳命(まさかつあかつかはやびあめのおしほみのみこと)の手に委ねることになったのだが……。

<1> 新しい葦原中國の船出

天照大御神と高木神(たかぎのかみ:高御産巢日神の別名)は、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命(まさかつあかつかはやびあめのおしほみのみこと)にこう言った。

「葦原中國(あしはらなかつくに)は平定した。予てより申し付けているように、この國に降りて治めよ」と日嗣の御子は、「私が仕度をしている間に子が生まれました。その子の名前は、天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命(あめにぎしくににぎしあまつひだかひこほのみににぎのみこと)です。この御子に葦原中國を任せましょう」と答えた。

この御子は、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命と、●万幡豊秋津師比売命(よろづはたとよあきづしひめのみこと)の間に生まれた第二子で、「天地が豊に栄え、日は高く輝き稲穂が瑞々しく実ることを称えた名前である。万幡豊秋津師比売命は高御産巢日神の娘で、「蜻蛉の羽のように薄い織物」を称えた名である。第一子は、天火明命(あめのほあかりのみこと)と言う。

天照大御神と高御産巢日神は、「豊葦原の水穂の國は汝が治めるべき国である。天より地に降りるべし」と、日子番能邇邇芸命(ひこほのみににぎのみこと:略称)に詔を示した。

<2> 邇邇芸命(ににぎのみこと)の登場

日子番能邇邇芸命が下界に降り立とうとした時、天上(高天原)と下界(葦原中國)を照らす神がいた。天宇受売命にこれを確かめに行かせた。(天神は、女ながら勇気のある天宇受売命に託した)その神は、「私は國神(くにつかみ)で、名は猿田毘古神(さるたびこ)と申します。天神の御子が地に下るとお聞きして、道案内をしようと思って、お迎えにあがりました」と答えた。

そして、天神は五柱の神にそれぞれ役割を示して、現身のまま随行を命じた。(五柱の神は下表)

葦原中國に下った神	これまでの実績	このあとの動き
天児屋命 あめのこやねのみこと	天照を天之石屋からおびき出すために祝詞を奏上	中臣連(なかとみのむらじ)の祖先となった
布刀玉命 ふとたまのみこと	天照を天之石屋からおびき出す神事のために「占い」をした	忌部の首(いみべのおびと)の祖先となった
天宇受売命 あめのうずめのみこと	天照を天之石屋からおびき出すために石屋の前で踊った	猿女(さるめ)の君などの祖先となった *君=部(べ)を率いる首長
伊斯許理度売命 いしこりどめのみこと	天照を天之石屋からおびき出す神事のために「鏡」を作った	鏡作りの連などの祖先となった
玉祖命 たまのやのみこと	天照を天之石屋からおびき出す神事のために「500個の勾玉が付いた玉飾り」を作った	玉祖連(たまのやのむらじ)などの祖先となった

天之石屋から天照を招き出すときに使われた、「八尺(やさか)の勾玉」「鏡」「草那芸劍(くさなぎのつるぎ)」のほかに、その時に貢献した常世思金神(とこよのおもいかねのかみ)・手力男神(たちからをのかみ)及び守護神である天石門別神(あめのいわとわけのかみ)の三柱の神は、現身を高天原に残したまま、霊代(たましろ)のみを下界に降ろすことが許された。

そして天照大御神は、詔としてこう言った。「この鏡は私の魂だと思って、私に仕え、祀るのと同じように、鏡に仕えて祀るように。思金神は政治を受け持って執り行え」

霊代だけが下ることが許された神		備考
天照の魂としての「鏡」		伊須受能宮(いすずのみや:伊勢神宮内宮の五十鈴)に、霊代を祀った
常世思金神	とこよのおもいかねのかみ	
手力男神	たちからをのかみ	佐那県(さながた:三重県の多気)
天石門別神	あめのいわとわけのかみ	守護神、別名:櫛石窓神(くしいわまどのかみ)・豊石窓神(とよいわまどのかみ)。御門の神
登由宇気神	とようけのかみ	度相(わたらい:伊勢神宮の外宮にいる神)

<3> そして、天孫降臨

かくして、天津日高日子番能邇邇芸命(あまつひだかひこほのににぎのみこと)は高天原の御座所を離れて、天浮橋の傍らにある浮洲からしばし下界の景色を眺めたあと、筑紫(ちくし)の日向(ひむか)にある噴煙たなびく高千穂の國に降り立った。

二柱の神が、背中に矢を入れる鞆(ゆぎ)を背負い、腰には頭椎之太刀(くぶつちのたち)を下げて、手には天之波士弓(あめのはじゆみ)を持ち、天之真鹿兒矢(あめのまかこや)を手挟んで、先導役を務めた。

降臨を先導した神		備考
天忍日命	あめのおしひのみこと	のちに大伴の連などの祖先となった
天津久米命	あまつくめのみこと	のちに久米の直(あたえ)などの祖先となった

地上に降り立った天津日高日子番能邇邇芸命は、「この地は、遠くに海を隔てて韓国(からくに)を望み、笠沙の岬を正面に見て、朝日が射し夕日が輝く国である。こここそが吉相の土地である」と言ってこの地に宮殿を造った。これが日向の宮(ひむかのみや)である。

<4> 閑話休題

*日向の高千穂はどこか

天孫降臨の地として様々な議論がある。宮崎県西臼杵郡高千穂町とする説が多数のようであるが、「噴煙たなびく高千穂」の記述からすると「霧島連山の高千穂峰」とする説も捨てがたい。

*笠沙の岬はどこか

「宮崎県延岡市の愛宕山(旧名:笠沙山)」とする説と、「鹿児島県南さつま市笠沙町の野間岬」とする説があるらしい。「海を隔てて韓国を望む」という記述からすると野間岬の方が正しいようにも感じられるが、降臨地(日向・高千穂)から近い愛宕山にも真実味がある。

<5> 猿田毘古神にまつわる話

邇邇芸命は天宇受売命を呼び、「ここまで道案内をしてくれた猿田毘古神(さるたびこ)を、伊勢國まで帰らせやらなければいけないのだが、お前の家で代々彼の名前を祀ってやるようにせよ」と命じた。

これが、「猿女(さるめ)の君」などの起源となった。

猿田毘古神が阿邪訶(あさか:現在の松阪市の小阿坂)にいた時に、海で魚捕りをしていて、比良夫貝(ひらふがい)に手を挟まれて溺れた。彼が水底に沈んだ時に●底度入御魂(そこどくみたま)と名が付き、水底から泡が立った時に●都夫多都魂(つぶたつみたま)と名が付き、泡が割れた時に●阿和佐久御魂(あわさくみたま)の名が付いた。

天宇受売命は命令に従って猿田毘古神を伊勢國まで送り届けた。天宇受売命は、海にいるあらゆる魚に、「お前たちは天神(あまつかみ)の御子にお仕えするか?」と尋ねた。

魚たちはいっせいに「お仕えいたします」と答えたが、海鼠(なまこ)だけが返事をしなかった。

天宇受売命は、「お前の口は答えのできない口なのか?」と言って、海鼠の口を小刀で割いてしまった。このため、海鼠の口は今でも割けているという。

天宇受売命が魚たちに忠誠を誓わせたことから、島の國(今の志摩)では、初物の魚が捕れて朝廷に献上する時に、子孫である猿女君(さるめのきみ)に下されるようになった。

かくして、大国主神の時代が終り、日子番能邇邇芸命(ひこほのににぎのみこと)の時代が始まった。

以上

.....<天孫降臨の概略図>.....

